

## 子どもとあそびを考える

入 江 史 子

情報化時代といわれる今日、子どもの身心の発達に様々な影響を与えている視聴覚文化を考えてみると、奇をてらった商業主義的なものが数かぎりなく氾濫していることに気づきます。たしかに視聴覚文化は、いろいろな意味で重宝できる面があるし、全く無視することができなくなっているのが現状です。

最近の子どもたちのあそびを一面からとらえてみると、英雄主義的な超能力を持つ主人公に自分がなりきって、「変身！」とやっている姿をみかけます。

広義な意味でのあそびとしてみると、真の発展性や創造性を促すものは望めない感じがしてなりません。一週間のテレビ番組を確実にマスターしていて、毎日何時間もテレビにかじりついている子どもたちがかなり多いと聞きます。

種々雑多なマスコミの中で、子どもたちは、それらを

のみこみながら、それなりになにかをつかみとつていく可能性を多分に持っているとは思いますが。しかし、それで良いのでしょうか。私達大人は子どもが成長していく大事な時期をあまりにもマスコミにゆだね過ぎてはいないだろうか。死の危険性がないのだからと安堵しすぎではないだろうか。

文明の発達と共に巨大なマスコミの網目がはりめぐらされ、人間がひしめきあい交通地獄さながらの社会、營利のみを追求するような社会の発展が、現在の子どもたち全般にわたって生活とあそびを圧迫しているといえなくはありません。

子どもにとつて、生活とは広義の意味でのあそびであり、自然と社会を通じていろいろなことを体得して行くと考えられます。

子どものあそびは歴史の流れ、社会の背景とともに変化してゆくことは、あきらかですが 私達の幼い頃よりも、更に劣悪な条件のもとに、自然と社会からしめ出されてきているのではないのでしょうか。

子どもは、自然のふところに抱かれて自由にのびのび